

## 日本キリスト教会大阪北教会

2017年10月1日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 エフェソの信徒への手紙5章6節～20節

05:06 むなしい言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです。 05:07 だから、彼らの仲間に引き入れられないようにしなさい。 05:08 あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。 05:09——光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。—— 05:10 何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。 05:11 実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。 05:12 彼らがひそかに行っているのは、口にすることも恥ずかしいことなのです。 05:13 しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。 05:14 明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」 05:15 愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。 05:16 時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。 05:17 だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。 05:18 酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、 05:19 詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。 05:20 そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

### 説教 『いつも父なる神様に感謝しなさい』

◆今日もいつものように礼拝のはじめで詩編103篇1節～5節の御言葉を交読いたしました。本当に素晴らしい御言葉であります。今日は格別な思いで読みました。それは、先週月曜日に主の御許に召された福岡悠紀子姉の生涯、その姿と重なって読むことができたからです。本当に神様はこの詩編103篇の通りのことを福岡悠紀

子姉になさって下さったのだと思いました。姉妹は、鷲のような翼を与えられて天に昇られたのです。

◆いま一つの事は、柴田長老が、今日の説教テキスト、エフェソの信徒への手紙5章6節～20節を朗読されました。その朗読を聞きつつ、私はこのように感じました。宗教改革者のマルティン・ルターは、この使徒パウロの勧告の言葉を聞いて、「95ヶ条の提題」を公言する勇気を与えられたのだと。その内容は、当時の教会の教えと真っ向から対立するわけです。ルターは「(教会の)空しい言葉に惑わされてはなりません」と、公言し、告白した時に、教会は改革され、刷新されたのだ、と思いました。このように聖書の言葉を、ただ言葉として読むのではなく、一人の生きた存在と重ねて読む時に、時に抽象的な言葉としてしか読めないものが、生きた、血の通った言葉になるのです。この二つの事を今日の礼拝に臨んで経験しました。

◆ところで、今年が宗教改革500周年の記念の年だと折に触れ申し上げて来ました。そして今日から始まる10月がその当月であります。1517年10月31日、カトリックの修道士であり、学者でもあったマルティン・ルターが、ヴィッテンベルク教会の門扉に、掲示板に、いわゆる「免罪符」に関わる『95ヶ条の提題』を提示したのであります。このことが宗教改革のきっかけになりました。これは当時の討論会の通常の仕方、しきたりだったのです。ですから、その仕方は何ら新しいものではなかったのですが、ルターが提示したその内容は、当時の教会が、教会の教えとしていた事と真正面からぶつかるものだったのです。これがいわゆる「宗教改革」のきっかけになったのであります。

◆この「免罪符」は、当時も今もそうなのですがカトリック教会の総本山であるローマの聖ペトロ教会の修復のために、その費用を集めるために教会が売り出した「御札」、それが「免罪符」であります。教会は修復に要する費用は十分持っていたのですが、それを出し惜しみ、信徒から集めようとしたのです。この「御札」を買えば、罪の償いは免れますよと宣伝、販売したのです。それに対してルターは、我々の罪・咎とその償い、謝罪ということは、決してそんな「御札」で片付くよう

な生易しいものではないというのがルターの主張であります。それは、本当に神の御独子、主イエス・キリストの十字架の死、犠牲、執り成しによってのみ、贖われるのだ。それは聖書に記されている通りであるというのがルターの主張であります。ところが当時の教会は、長い間に、福音の真価を空しくし、教会堂修復の資金集めのために「免償符」「免罪符」「御札」を販売したのです。そして、このことは当時だけのことでなくて、教会は、それ以前からも、聖書をそのように読んで来ていたのです。それをルターは「むなしい言葉」と断じたのです。

◆ルターは『95ヶ条の提題』の第1条において、こう言います。「我々の師であり主であられるイエス・キリストが、『汝ら、悔い改めよ』と言われた時、主は、キリスト者の全生涯が、日々、悔い改めであることを、求められたのである」と。教会であれ、如何なる組織であれ、それが長く続くうちに、固定化し、だらけてしまい、命を失ってしまうのです。それは、ただ組織だけではなく、わたしたち信仰者一人一人もそうなる恐れが常にあるわけです。

◆「悔い改め」ということについては、これまでも何度も言ってきたことですが、「理解の改まり」のことなのです。＜メタノイア＞というギリシャ語は、素直に訳せば、「理解の改まり」です。今までこうだと思っていた事が、根底から、根本的に、180度、転換すること、転換させられることです。このような「悔い改め」が起きる時、＜この私は、キリストにおいて、何という恩寵・恵みに与っているであろうか＞という驚き、認識、自己認識に覆われるのであります。これが「悔い改め」です。神様の無比なる御愛に与っているという、驚くべき事実を、日々新たに覚えることが、「悔い改め」です。かかる次第でありまして、宗教改革の「三大原理」は、「聖書のみ」「恵みのみ」「信仰のみ」という事であります。これらの事をルターは「95ヶ条の提題」という形で表したわけであります。

◆それで、今回「95ヶ条の提題」を巡り、「えっ！」と思ったことがあります。この「95ヶ条の提題」をルターが掲げたのは、1517年10月31日のことでした。その時ルターは何歳だったのかと思い、調べてみますと、ルターは1483年11

月10日 生まれで没年が1546年2月18日ですので、若干34歳であります。そして34歳と云えば、イエス様が私たちのために、十字架にお架かりになって下さったのとほぼ同年代であることに気付きました。ですから、ルターが「95ヶ条の提題」を掲げたために、教会から破門され、国から追放され、文字通り、身の置き所がなくなるのですが、彼は、十字架の主、復活の主・イエス様に捕えられて、我々が、私が与かっているこの神の御恵みというものは、教会が教え、「御札」で安売りしているような、そんな陳腐な、安価なものではないのだと言う事に気づき、命がけで、この事、神の無比なる恵みのことを、提題の形で表したのです。ここにキリスト者の信仰の神髄があります。

◆それで、私たちが宗教改革500年を記念することは、やはり、意義深いことだと思いますが、わたしたちが、この500周年の時をどう過ごすかということです。わたしたちの教会は、色々な意味で、行き詰まりを覚えています。その時に、これからどうすればよいのか。教会の刷新のためにどうしたらよいのかを、いつも思案しています。

◆一つは、若い、新しい力を、教会に導入することだと思います。卑近な例ですが、昨晚6時から、隣の市立科学館の庭で、町内会の「観月会」がありました。その時この夏の日曜学校の夏期学校に来た、お隣のN4タワーのレナちゃんとお母さんにお会いしました。「レナちゃん！覚えてる？」と聞きますと「うん」とうなずいてくれました。レナちゃんが夏期学校に来るきっかけになったのは、久保渕さんが、N4タワーにチラシを持って行ってくれたことでした。私たち、教会に古い者は、過去の経験から「御隣はダメだ」と思い込んでいました。しかし「若い」久保渕さんは、そんな事は意に介さず、飛び込んで行かれたのです。そんな事で、古い者は、あれもダメ、これもダメと、自己規制している面があります。教会は若い力、新風を取り入れなければなりませんね。

◆いま一つは、皆ができることであり、為さねばならないことがあります。それは、70台であろうが80代であろうが、各自、自分自身が若返ることです。ルターの

云う「生涯、日々新たな悔い改め」です。本当にキリストにおける神様の御恵みは、何という事なのでしょう。この一事を、私達が朝毎に覚え、この恵みに与って生かされていることを、朝毎に覚え、感謝し、讚美して生きることです。若返りの秘訣、鷲の翼は、キリストにおける神の恵みを自覚することです。

◆今日の聖書にこうあります。14節です。「眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる」と。わたしたちは幸いにも今日まで守られて、信仰の歩みを為してまいりました。しかし、それが、惰性に流れていないでしょうか。18節以下にこうあります。「霊に満たされ、詩編と賛歌と靈的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」と。このように、わたしたちが、霊に満たされ、心からの賛歌を、主の日毎、夜ごと、朝毎に歌うならば、私たちの霊性は、活性化します。そのようであるならば、外から新たに教会に来られた人は、瞬時に、気付かれますね。この教会に満ちているものが、命の霊なのか、惰性の霊なのかを。この教会に溢れているこの空気は何かと思われませんか。ですから私達各自が、何歳であれ、信仰的に初心に立ち返り、霊に満たされて心からの賛美を歌うことです。これは決して無理なことではありません。これは誰にでもできる事ですし、しなければなりません。恩寵の賜物です。

◆それで先ほども柴田長老がお祈りの中で、福岡悠紀子姉の召された事に触れてくださいました。先週の日曜日、皆さんが帰られた後、孝子さんと二人で市立池田病院にお見舞いに伺いました。次女の恭子さんと3女の慶子さんが看病しておられました。「森田先生と孝子さんが来て下さったよ」と言っても応答のない状態でした。肝炎から肝臓癌、そして肺に転移した癌と最後の戦いをしておられたのでしょうか。悠紀子姉の顔は、今まで一度も見たことのない病人のお顔でした。葬儀の辞の中でその様子をお話しさせて頂きましたが、あの讚美歌 268 番” 御国の心地す “を朗読し、「主の祈り」をお祈りし、アーメンと唱えた時、それまで私たちの呼びかけに反応を見せなかった悠紀子姉が「アーメン」と唱和されたのです。そして今の今までの憔悴しきった御顔は消え、澄み切った御顔に変貌していたのです。これは私達

4人の目の前で起きた事実ですが、実に劇的な変貌でした。268番の3節に、“山にも谷にも、小屋にも宮にも、日々主と住まえば、御国の心地す”とありますが、如何に苦しみの極みの病床であれ、そこも主が共にいて下さる御国であることを、主なる神様は私たちにお見せ下さったのです。これが、私たちが現に与かっている御国の幸いです。本当に、私たちは、何処にありても、御国の民なのです。

◆今日の箇所には、色々の勧めの言葉がありますが、最後の20節で、パウロはこう勧めております。「いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい」と。この勧めの内容自体が使徒パウロの日々の生活なのですね。そして、ルターも、この勧めの言葉に捕えられて、『95ヶ条の提題』を告白したのです。宗教改革500年のこの年、恩寵に目覚めて、信仰の初心に立ち返り、日々感謝し、祈り、讃美をささげる。その時私たちの教会は、少しは、神様の御用に役立つ教会に変えて頂けるのではないのでしょうか。そのような信仰の道を、思い新たに、ご一緒に歩んでまいりたく思います。

◆お祈りいたします。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたは御独り子イエス・キリストを賜るほどにわたしたちを愛して下さいました。今も、その御愛の中に私たちを置いて下さいます。人生、いつ、何が起きるか、わたしたちは知り得ませんが、何が起きるにせよ、あなたがイエス様によって示して下さいました御愛から、私たちを引き離し得るものは、この世にはありません。その事を今新たに覚えて感謝致します。どうか、愛する者を御許に送り、淋しさを覚えている姉妹達に御慰めを豊かにお与えください。しかし、御許に召された福岡悠紀子姉が、私たちに残してくれたその信仰と、澄み切ったお顔は、私たちの大いなる慰めであり、励ましであります。私たちも、姉妹のように、地上の歩みを全うし、あなたの御許に召されたく思います。それまで、どうか、わたしたちが、心を尽くし、力を尽くし、感謝しつつ、御名を讃えつつ信仰の歩みをなさしめてください。この祈り、主の御名を通し、御前に、お捧げいたします。アーメン。